



紫芳会だより ～輝く先輩達～

No.15

2013.11.1.発行

NHK交響楽団ティンパニ奏者

植松 透氏 (高校36期)

国立音楽大学・同大学院を首席で卒業。オーケストラ活動はもちろん、国内外の音楽祭・ワークショップにも多数参加、またジャズや邦楽など他ジャンルのアーティストとも積極的に共演し好評を博している。自らが主宰する「たいこアンサンブル・トムトム」では幼児と音楽の関わりを演奏者の視点から捉える研究活動も長年続けており、国立音楽大学、洗足学園音楽大学では後進の指導にも積極的に携わっている。立高吹奏楽部OB会会長としても活躍。

父親が声楽家だったこともあり小さいときから手ほどきは受けてはいましたが、本格的に音楽に取り組み始めたのは立高の吹奏楽部に入部してからですね。本当は国立高校の野球部に入って甲子園を目指すはずでしたが当時の群制度により残念ながら立高に…。野球はやめて美しい先輩に憧れてという不純な動機とオーボエが吹いてみたかったという純粋な動機とで吹奏楽部に入部しました。ところがオーボエなんて高価な楽器はなく、ガラクタのような打楽器をやることに。ところがこれがおもしろかった。子どもでも叩ける楽器なのにちょっとした加減で音楽の響きが流れががらっと変わる。中学生の頃から好きで通っていたN響の演奏会でも打楽器に釘付けでした。あの舞台で打楽器やりたいなって…まあ運命なんてそんなもんです。

当時の立高はなんでもかんでも学生主体の高校でした。文化祭も合唱祭も体育祭も全て学生の手作りでした。先生どこにいたのかなあ…。もちろん吹奏楽部も運営は学生のみ。顧問の先生は合宿に来るくらい。あまりにも関わらないのでわざわざ演奏会のチラシ持って行って先生演奏会やりますよーって。当然練習も後輩の指導も自分たちで、アレンジも自分たちで、指揮も演出もゼーンぶ自分たちでやっていました。だから当然レベルは低い、稚拙…。演奏会のレコード作ったんですが、CDじゃなくてレコードね、最近レコードプレーヤー買ったので30年ぶりに聞いてみたんですがいやひどい(笑)恥ずかしいくらいヘタッピです。



でもね、どうしてなかなかいい音楽してるんですよ。たしかに上手い演奏には遠回りな部活だったけど、仲間と共に音楽漬けの本当に密度の濃い時間でした。物質的にも金銭的にも今とは比べものにならないほど恵まれてなかったけれど苦ではなかった、むしろ試行錯誤しながら自分たちの手で音楽を作る喜びに満ちていた気がします。そもそも音楽ってそういうものです。技術的に上手くなることは簡単、練習すればいいんです。でも音楽とはなにかを理解せずに高度な技術を身につけてもそれはまったく無駄な話。そもそも音楽って何なんだろう、なぜ音楽会をするのか、なぜ仲間とアンサンブルするのか、音楽の持つ意味、本質について真剣に向き合っていたのがこの立高の3年間だったんですね。

その体験が今の自分を支えているのは間違いありません。N響は年間130回ほど演奏会があります。リハーサルは多くて3日間。指揮者も変わるしその度にスタイルも変わる。何回もやる曲もあれば世界初演もあります。なかなか頭に入らない曲もあります。時々逃げ出したくなります…。今年勤続20年になりましたが今でも曲が追いかけてくる夢をよく見ます(笑)でもどんな演奏会でもそれを楽しみにしている人がいる、遠くから聞きに来てくださる人もいる、もしかしたらこれが最後の演奏会という命がけの人もいる…。そんな方々に音楽を届けるためにボクは今でも立高の3年間を3日間のリハーサルに凝縮するんです。



音楽って空腹を満たすわけでもなく、雨風をしのげるわけでもなく、普段はなくても困らないものですね。でも世の中からいろんなものが失われていったらきっと必要にされるものだと思います。東北の被災地の子供たちと時々打楽器で遊んでいます。これからも音楽と共に歩んでいきます。